



共同通信



2010年9月28日 169(379号)

日本基督教団 西宮公会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 69 「台湾から大家好！」

大家好(だぁじゃあはお)! みなさん、こんにちは! 7月の末に、台湾へ引っ越した年長組の立木です。

見送ってくれたみんなの顔が涙でちゃんと見れなかった、西宮を出発したあの日。関空のホテルに着いた私に、順子先生からお見送りのメールを頂き、その中に通信を書いてみませんかと提案がありました。「恐れ多いので・・・」と遠まわしにお断りしたつもりが、先生からは「待ってます!」の返事が・・・!! ということで、大好きな共同幼稚園の皆さんに、手紙を書くつもりで書かせていただきました。

7月31日、関空から台北の桃園空

港へ飛び立ちました。所要時間は3時間とありますが、実際飛行機に乗っているのは2時間15分くらいでした。機内では、離陸直後に健太が突然の鼻血を出し、家族みんなで大パニックとなりましたが、親切な隣の方がティッシュを下さり、鼻血もすぐに止まり事なきを得ました。その後は出てきた機内食に子どもたちのテンションももと通り。大人の食事にはハラダのラスクが付いていて、またまた幼稚園のみんなのことを思い出したのでした。

そして4ヶ月ぶりにとーちゃんと再会。何ともいえない照れた表情の淳平(3年生)と、いつもと変わらない

時代にふり回されるのではない
あの時 心を躍らせて生きた
後悔に 身をふるわせたこともある
笑い 泣き 歯ぎしりをした
今日 こんな決意をしたという

自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい

健太と康太。でも3人共、とーちゃんに話したいことがいっぱいあって、口々におしゃべりが始まりました。台湾では左ハンドル、右側通行で、日本とは比べ物にならないくらいバイク（原付）がたくさん走っています。ちょっと荒々しい交通事情の中、4ヶ月の間に車の運転にも慣れた、とーちゃんの運転で、新しい家に向かいました。窓の外の見慣れない風景を見ていると、「これから大丈夫かな・・・」と漠然とした不安がこみ上げました。でも横で康太がキャンディキッズを熱唱しているのを聞いていると、「きっと大丈夫！」とあてもない自信が湧いてきて私も一緒に歌いました。

空港から50分くらいの所、台北市の天母（ていえんむー）と呼ばれている地区にある新しい家。今までは6畳に布団を敷き詰めて5人で寝ていたのが、今日からはベッドでそれぞれの部屋で寝ることになります。予想通り、初日は3人とも落下・・・、ドシンと夜中に音が響きます。二日目はまた一人・・・。でも3日目になると誰も落ちなくなり、子どもの順応の早さに驚きました。それでも時々、康太は落ちて・・・夜中に私たちの間にもぐりこんできます。。

さてこちらの気候ですが、亜熱帯性でさぞかし暑いだろうと覚悟していましたが、気温は高くても34、5度

に入ると汗が引きます。我が家では光熱費対策として出来るだけエアコンはつけずに、扇風機で過ごしています。それがやせ我慢ではなく、十分過ごせるのです。夕方に夕立があったりすることも多く、意外と涼しいです。

こちらでの生活にも慣れてきた8月半ば、さあ幼稚園をどこにするか・・・探し始めました。家から歩いては通えないところにしかなく、それほど遠くもない3園に的を絞り、見学、あるいは半日体験をさせてもらいました。私の気持ちは最初に行った幼稚園で園長先生に会った瞬間に決まりました。日本語がお上手すぎて日本人だと思っていたら、台湾人だと分かりびっくりしましたが、順子先生みたいな可愛い笑顔、健太と康太を一目で見分けて！、行くのを渋っていた健太をさらりと皆の中に連れて行って下さる姿、先生が手書きで書いておられる園だよりに、石堂先生がよく載せてくれる、くだうなおこさんののはらうたが書いてあったり、帰る私たちの手を握って下さる温かく強い手に、「きっとこの幼稚園に来るな。」と思いました。すぐ近くに川が流れているというのも大きなポイントでした。

それでもほかの幼稚園にも行ってから二人に選んでもらいました。答えは私と同じでようやく幼稚園が決まりました。それでも「共同幼稚園が

いい・・・。」と言う健太の言葉に「そうだね。」と答えることしか出来なくて・・・。きっと康太も同じ気持ちなんだと思います。小さい頃からどちらかが駄々をこねると必ずもう一人は賢くしてくれていた二人です。

そうして決まった幼稚園、8月23日から始まりました。健太は園バスに初日は嫌がって乗りませんでした。2日目は園服（ポロシャツと短パン）を着るのを嫌がりました。3日目は何も嫌がりませんでした。幼いながらに、覚悟を決めて、自分の居場所を作ろうとしているんだろうと思います。早く、早くと私があせらせないように肝に銘じたいと思います。

淳平の小学校も24日から始まりました。台北日本人学校は保護者の送り迎えが必須で、毎日お弁当持ちです。日本とは違い2学期制なので、9月までは前期です。そこで初日の24日は始業式などはなく、普通に6時間授業でした。体育ではプールにも入ったそうです。新しいこと、新しい場所に慣れるのにとっても時間がかかった幼稚園時代の淳平でしたが、今回新しい学校の友達に出会うこと

を、緊張しながらも「半分楽しみ！」と言えるようになった姿に、成長を感じました。子どもは日々進化しているんですね。

家族が一緒なら何でも乗り越えていける！と信じてここまで来ました。色んなことがあると思いますが、家族として丁寧にお互いに向き合う時間だと思っています。もちろんここでの出会いも大切に過ごして行きたいと思います。それが園長先生と順子先生に教えていただいた1番のことですから。

そんなこんなで、我が家の台湾での生活が本格的にスタートしました。お友達のみんなや先生からいただいたメッセージは我が家の宝物となっています。家族で何度も何度も読み返して元気もらっています。本当にありがとうございました。また会いに行きますから待っていてくださいね。再見！

（立木 充代）

「たとえ群れでなくてもヒヨドリとら鳥はかきもすれだ街の鳥
とらイメージがあった。けれどこのヒヨドリのすっか理鳥め、た真
重さ、つましさはどうだろう。場所が違つと人柄ならぬ鳥柄まで変
わってしまうのだろうか。環竟が彼をそうさせるのか。環竟が彼をあ
あさせていたのか。」

(「渡りの足跡」梨木香歩)

「あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモン王でさえ、この花一つほどに着飾ってはいなかった・・・」(マタイによる福音書6章29節)と言われるソロモン王のことが書かれているのは、旧約聖書列王記上2章～11章です。その“栄華”は、「ソロモンの一日の食物は、細い麦粉三十コル、荒い麦粉六十コル、肥えた牛十頭、牧場の牛二十頭、羊百頭で、そのほかに雄じか、かもしか、こじか、および肥えた鳥があった」(同4章22～23節)、「ソロモンは自分の家を建てたが・・・長さ百キュビト、参列の香柏の柱があり、その柱の上に香柏の梁があった・・・」(同7章1～2節)など、止まるところを知りません。

ソロモンを王に選んだ神は、「・・・そこで神は彼に言われた、『あなたはこの事を求めて、自分のために長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えをききわける知恵を求めた

ゆえに・・・、見よ、わたしはあなたの言葉にしたがって、賢い、英明な心を与える』」(同3章11～12節)なのですが、その神の求めに“栄華”で、ソロモン王は答えます。マタイによる福音書がソロモンの栄華に対して、“野の花・この花一つほどにも着飾ってはいない・・・”と言うのは、どうであれ身近に自然があって、その営みの一つ一つが、日々の生活の中から見えていたということです。ソロモン王の誇るきわめつきの栄華、そのいずれもが“量”に始まって“量”に帰着します。美しさというものが“量”ということであれば、ソロモン王の栄華は、いっぱい香柏で飾ったとしても、醜悪なだけです。身近に自然があって、その営みの一つ一つが、日々の生活の中から見えれば、すべて余分なものをそぎ取って生きる、野の花は、その存在が奇跡と思えるくらいよくできていることに気付くはずです。西宮公会堂の前を流れる津門川で、今年川を覆う

ようにオオカナダモが繁ってしまったのには理由があるはず。いつにも増して、オオカナダモの白い花が目につく光景は、それはそれで目を向けたくなくなるような水面の様子になっています。白い花は、藻が沈んでいる場合、その分だけ長く細い茎を水面まで伸ばして、花を咲かせます。3枚の白い花びらにひだがあるのは、たぶん水面に浮かぶ仕掛けで、3枚の花びらで水から守られ、寄りそうようにして約10本の雄しべと雌しべが並んでいます。“着飾っている”のは、花びらの白と、雄しべと雌しべの黄色だけですが、他のすべてをそぎ落としたその花は、人の目を引きつけないではおかない力を持っています。マタイによる福音書が「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていない」と言う時に、そんな意味での野の花の生命力と美しさに気付いていたはず。す。

たとえば、そのあたりに落ちている鳥の羽根、それが大き目のマラスの羽であっても、空を飛ぶ生きものの、空を飛ぶ“道具”として見る時、その完成度の高さに驚かされます。手元にある、約30センチ、カラスの“風切翼”(たぶん?)は、重さが約1gです。幅4センチ、軸の太さ最大で約3.5ミリで約1gの重さの翼を、人の手で作り出すことも、別に“雨霧”などのたくさんの翼を組み合わせ、鳥

として空を飛ばすのは、至難を通り越してほぼ不可能です。マタイによる福音書が、「空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。・・・天の父は彼らを養っていて下さる」と言う時、身近に自然があって、その営みの一つ一つが、日々の生活の中から見えてはじめて言い得たのです。

マタイによる福音書は、理屈っぽく(「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべてあたえられるであろう」と言ったり、他方では、「・・・野の草でさえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるか。ああ、信仰の薄い者たちよ」(マタイによる福音書6章30節)などと言ったりもします。身これは近に自然があって、その営みの一つ一つが、日々の生活の中から見えるのであれば、信仰はそんなに遠くはなかつたりすると言っているようにも読めます。

(菅澤 邦明)

～今月のいのり～

風や空がすっかり秋めいてきました。

暑さで大変な夏でしたが、過ぎるとたくさんの夏の出来事が心に残っていることに気づきます。

子どもたちがキャンプで自然に触れたとき最高の笑顔を見せてくれたこと、新鮮な聖書の学びをしたこと、教会玄関の横の水槽にいた、一番長生きして一番大きかったメダカが死んだこと。

いつ終わるのかわからない、ずっと終わらないかもしれないと思うような日々がやっぱり終わって、こうして自分が年月を重ねて生きてきたのだと感じています。

神様、新しい季節を感じる心を私たちに与えて下さったことを感謝します。

いつでも、どこでも、必ずやってくる新しい毎日を喜んで受け入れていくことができますように。

(大平 有紀)

“ 出会いの奇跡 ”

つい最近まで、まだまだ暑い！暑い！暑い！と思っていたのに、なんだか気がつけば、きこえてくる虫の声がセミたちの大合唱からキリギリスたちのオーケストラにかわっていたり、ふと立ち止まった木陰がとても涼しかったり、肌で感じる風がずいぶんひんやりしてきたり...いつの間にか子どもたちのプールパンツの出番もすっかり終わってしまい、本格的に秋がやってきました。さて、「出会いの奇跡」を感じさせられ

ている毎日の中で、先日は西北 LALALA ミュージックコンテストのスペシャルゲストとして後川の子どもたちが西宮を訪れてくれたのです。いつも私たちがあちらへ訪れ、そして向こうでしか顔を合わすことのない人たちが、私たちが生活する西宮へ来て下さって、そして顔を合わせた時は...嬉しくて、恥ずかしくて、なんとなくムズムズするような感じがしました。

後川の子どもたちが歌ってくれた

歌、「しあわせの日」。年長組の子どもたちも少し前から歌い始めていたので、前奏が流れた途端に「あっ！」の顔。「みんなも歌ってね」と声をかけると「歌っていいの？」なんて嬉しそうな顔で。知っているピアノが流れ始めれば、どんな場面でも前奏から歌い始めてしまうかわいいぽっぽさんだったみんなは、色々な体験、経験を積み重ねていつの間にか「ステージで他の人が歌っている時は耳をすませて聴く」なんて分別のある(笑?)すっかり「大人」になっていて驚いてしまいましたが...声をかけたとたん大合唱の年長さんたち、後川の子どもたちの声とみんなの声とが合わさった歌声は、どのミュージシャンたちよりも素敵だったな~と思っています。

礼拝堂に響くのは子どもたちの声だけではありません。先日はおじいちゃん、おばあちゃんの優しい声が響いたのです。そう、おはぎパーティーです。子どもたちの歌声をうっとりとしながら聴いて下さっている方、歌声に肩を震わせて涙を拭いている方、自分の孫だけでなく、子どもたちみんなに注いで下さっている温かな視線。礼拝堂のあと、園舎へ移動してお母さん方お手製のおはぎをみんなでいただきましたが、その時もたまたま隣に座った子どもに「美味しいね~」「まだおかわりするの?! 食べすぎよ~もうやめといたら

~笑」「ほらほら、ちゃんと器持って食べなさいよ」なんて我が孫のように声をかけて下さっている姿や、おじいちゃん、おばあちゃん同士でワイワイお話されている姿、また、わらべうたの時間では手を取り合った子どもと、思いきりギュー！して下さっている姿...そのどの場面でもイキキとしたみんなのいい顔を見ながら、ここでもまた新たな出会いが生まれた喜びを感じる時間だったのです。

大切なおじいちゃん、おばあちゃん存在に感謝しながら、また改めて子どもたちとの「出会いの奇跡」を感じさせられました。みんなが今ここにすることは数えきれないくらいのお出会いがあって生まれた命なのだという事を、時々でいいからこうして思い出させてくれるひとときがあれば「命」をもっともっと大切にしていけるのではないかな、とそう思います。

おじいちゃん、おばあちゃんいつもありがとうございます。これからもよろしくね！

(藤原 紘子)

すずや便り

昨年末から、公同文庫の絵本リストを作成していましたが、やっと完成しました。

締め切りを区切られなかったのいいことに、文庫の30数年を旅するような時間を過ごしてきました。登録番号1番は1977年2月に受け入れたジューヌ・ベルヌの「二年間の休暇」です。

十五少年漂流記の完訳版だそうですが、意外にも？初めの20冊ほどは児童文学なんですね。すぐに絵本も現れますが、これが私の子ども時代とドンピシャリ重なってしまっていて、小学生の頃の愛読書「岩波の子どもの本」シリーズ～百まいのきもの、村にダムができる、九月姫とウグイス、金のニワトリ、スザンナのお人形、まいごのふたご、どうぶつのこどもたち、ねずみとおうさま～が続けて出てきたときはそのまま実家の本棚かと思ってしまうました。同じ時期にまとめて購入したのでしょうか。公同文庫と同じラインナップとは嬉しいと同時に両親に感謝です。「わたしとあそんで(エッツ)」は長女が初めて文庫から借りてきた本、「じごくのそうべえ(田島征彦)」は土曜日の文庫に参加して、園長先生に読んでもらい大阪弁のおもしろさを実感した本。

ワース)」は入園前にフリーマーケットで長女が一目ぼれ、園長先生が「この表紙の赤がいいのです」と話しているのを聞いて改めて読み返した本。カニグズバーグ「ロールパン・チームの作戦」は、思春期でモヤッとしている中高生や大人の方もぜひ。

リスト作成中に衝動買いした本もいくつかありますが、一番の大物は「源平絵巻物語」です。赤羽末吉の絵には弱いのですが、リストで見かけて何気なくアマゾンで探してみると在庫1！これは呼ばれたに違いない～と10冊セットは自分へのクリスマスプレゼントになりました。そんな口実をつけないといけなくらいのお値段だったわけです(^ ^)。

最近の本では2009年購入の「クックとブッケ」シリーズが小学生の皆さんにお勧めです。

「タンタンの冒険旅行」で知られるエルジェの作品ですが、大のタンタン好きの長男が以前1冊だけ会議室で見つけてしばらく借りていたことがあります。5冊シリーズで入っているので！見つけたら長男は動かなくなることでしょ。結末がわかる面白さなのですが、ぜひ文庫の部屋で手に取ってみてください。在庫総数5789冊なので、きっと皆さんにも書名とともに思い出が浮かんでくる本

があることと思います。在園中は折に触れて絵本を読む機会がありますが、卒園して終わりではもったいない！ぜひ土曜日の共同文庫でたくさんのお本と出会ってください。夏休みに文庫の部屋にお邪魔したらとてもきれいに整理されていました。暑さが和らいだら、読書の秋を楽しむのもいいですね。

(富家 香麻里)

みかん便り

8月です。最近の自分は何もしていません。何をしたいのかもよくわかっていません。そんな毎日です。やらなければならない事はわかっているし、やる事が多過ぎるという訳でもありません。ただ毎日をボーっと過ごして、踊りの練習にも身が入らず、ダラダラと過ごしていました。先月までは確かに少なからず満足した生活を送っていた気がしていましたが、何ででしょうね。そんな感じが入った夏休み！まずは共同キャンプ！！毎年なら1番気分が高まるイベント 少なからず何かを得られるこの時間。でも、今年は冷めた目です。ずっと過ごしていました。何かしら得られたのかもしれないし、夜に園長先生と話した話もしっかり記憶に残っています。でも、やっぱり何を得

られたのかははっきりしません。周りの環境や人間は関係なく、自分自身の気の持ち方のせいですね。新しい後川というすばらしい環境で、新しい仲間と出会い、何かを探し、感じられる時間であったのに、何も残っていない。とても勿体ないことをしました。キャンプから帰った後も8月はたくさんの事がありました。英語のスピーチコンテストの決勝戦では苦手な英語で自分のことを伝える場を得たり、夏季の集中講義で新たな友達も出来ました。8月の終わりには静岡へ踊りの講習に行き、ここでも新しい出会いがありました。でも、この出会いもやっぱり記憶の中でも出会いにしかなくなっていませんでした。

『ほんのちっぽけな出会いにも大きな意味がある。それを大事に出来る』 9

奴と一緒にいたい』これが今村組で踊っていた時にずっと大事にしていた気持ちです。実際みんなそういう奴らでしたし、自分もこういう気持ちを持っていたという実感があります。自身をあります。でも、今は何かが違う。ずっとモヤモヤしていました。

そんなこんなで8月が終わり、9月の頭のことでした。もう、踊りも全くやっていません。仲間には9月はイベントもないし、休みにしようと提案しました。全部自分のわがままです。このまま何の充実感も得られないまま夏休みが終わっていくんだなぁと考えていたとき、ふと自分が1番充実していた頃の映像を見てみようと思いました。高校2年生、今村組に入団し、札幌ソーラン祭りに初めて参加した時のDVDです。『もう俺らは絶対負けへん！！』この合言葉は確かに自分の中の自信に繋がっていました。それは2ヶ月間必死に自分を追い込んで得た自信でした。時間も少ないし、何しろ新人で何をすればいいのかもわからない。ただひたすら闇雲に睡眠時間、遊び時間を削って練習の毎日。しんどいですが苦痛ではない。そんな中で得られた自信と満足感。それがDVDの中にいる自分でした。気が付けばDVDを見ながら涙を流していました。今の自分は「これぐらいやったらなんとかなるやろ。」

気持ちで生活しています。踊りもそう。勉強もそう。友達関係も、バイトもみんなそう。自分で適当に到達ラインを決め、その程度で終わる。やっている実感はあるけど、やりきった感はない。思い返せば、キャンプもスピーチも講義も講習も、全部、「なるようになるやろ。」という気持ちで臨んでいました。そのイベントで何かを見つけてやるのではなく、そのイベントには何かがあって、何かを感じられるだろうという受身な気持ち。8月は全部受身でした。あかんですね。高2の自分に教わりました。

武田鉄矢さんの言葉でこんな言葉がありました。

「10代のときに何か1つかっこいいことをしておくで、歳をとってもずっと自分を支えてくれる。」

まだ20歳の若造ですが、ちょっとは意味がわかります。

9月は2週間、インド・ネパール・香港と旅をしてきました。ずっとあのままじゃ、きっと何も感じられず旅を終えてしまっていたのかもしれない。高校2年の1番頑張っていたときの自分。みかん便りを書き始めた大学1年の夢と進路を見据えていた自分。やっぱり目標を持ってる頃の自分が好きです。

海外旅行の目的は、「新しい出会い」「今後のつながりを作る」この2点。やっぱり僕は人といるのが好きですし、人との関係を大事にしたい。

なのでこれが目標です。海外は受身では何も生まれないことくらいはわかっているので、積極的に、がむしゃらにコミュニケーションをとっていきたいと思い、挑んできたつもりです。

今回はそのインドでの出来事を書きます。

(河村 高志)

2010年9月 あんなこと こんなこと...

教会学校から

《8月の活動報告》

8月29日(日) おみやげ&おみやげ話パーティ

《9月の活動予定》

9月5日(日) 津門川川掃除大会 / ひらき・まつり

9月12日(日) 後川 DAYS ! 後川クイズ&デカンショ節を踊る

/ 2010LALALA ミュージシャンコンテスト予選 ~ 後川の子どもたちを招いて

於：西宮公会堂礼拝堂

9月19日(日) 鹿児島・川内教会のことを知ろう

9月26日(日) “星ころ” を作る

大切な贈り物・津門川 9 5

“ 津門川しらべ ”

つとがわ 編集後記

ゴシックの大聖堂に関する本を読むことになりました。「ゴシックの大聖堂」(O.フォン・ジムソン)、「フランスの大聖堂」(オーギュスト・ロダン)、「ランスの大聖堂」(ジョルジュ・パタイユ)などです。

「アウグスティヌスによれば、最もみごとな比は同等あるいは相称のそれ、すなわち1:1の比である」「数の最高位がなければ、宇宙は混沌と化すであろう」(前掲「ゴシックの大聖堂」)。そのアウグスティヌスの宗教哲学を“完全”な形で具現しようとしたのが、ゴシックの大聖堂、たとえばシャルトルの大聖堂だったりするのだそうです。元になるアウグスティヌスの考え方も、実際にそれを建築していく人たち、それを支える人たちも半端ではありませんでした。ロダンはシャルトルに旅して、「人々はシャルトルに、ほかのどのようなところとも同様、神に祈りをささげに来ることが出来る。なぜなら神は到るところにおられるからである。だが人々はまた、ここに、その半分を發揮した人間を賛美する為にも来ることが出来る」と書きます。パタイユは、焼け焦げたランスの大聖堂の印象を「かくして大聖堂が燃え上がるのを見た人は皆、不安でひどく息苦しくなり、そのため、世界全体を傷めつけている裂傷の心象を、私たちの生と喜びを作り出すいっさいのものを絶望的に引き裂いている裂傷の心象を、深く持ってくれました」と書きます。それを見つめる目も、印象も、半端ではないのです。

北村慈郎紅葉坂教会牧師を「未受洗者に配餐した」ことを理由に、牧師としての身分を奪った人の「この決定を受け入れ、貴方が悔い改めをもって復帰への道に進まれることを願う」という言葉は、その動機も決定もすべて半端そのものです。

(K)

赤、朱、橙、緋、いろんな赤い色を表現する言葉がありますが、先日子どもたちと見たアキアカネの色はどれもあてはまらないような、見事な色でした。

私の中で、過ぎた夏が寂しく、恋しくなりがちな今の時期ですが、出会った秋に嬉しくなったひと時でした。

(I)

青空でも夕焼けでも夜空でも、空を見上げるのが好きです。

この夏は、西表島に行って、歩道に寝転んで星空を眺める、という贅沢な時間を過ごしました

9月22日は中秋の名月！少し曇ってはいいましたがまんまるお月さまを見ることができました！秋にはグッと高くなった空に鱗雲～というのいいですね

(Y)

あまり手先が器用な方ではなくて原理はわかっているも鏡を見ていざやと思うようにならなくてできなかった編み込みが最近やっと！できるようになりました。

髪の毛の長さもでてきて今編み込みにはまっています前髪を編み込んだり全部まとめてみたり、毎朝どこに編み込みを入れようか～と楽しんでいます。(パタパタする朝、時間がある時に限るのですが)

伸びた髪の毛、どうしようか迷っていましたがもうしばらく切らずに楽しみたいと思います
明日はどんなヘアスタイルにしようかな～

(N)

毎日は無理だけれど月曜日や土曜日の朝に楽しんできた「ゲゲゲの女房」、いよいよ最終週に。23日は水木プロ20周年の記念パーティーの場面だった。出会って25年という水木の漫画仲間が「まあわたしちも漫画とつきあって4半世紀よ！」と‘女房’どうして感激する場面があった。そうか25年！実はその前日に「卒園して25年、ご無沙汰しております」とNくんから共同のパソコンにメールが送られてきた。便利な世の中になったもんだ。懐かしい！3人兄弟の末っ子、当時の顔も浮かぶ。おかあさんは役員をしてくださっていた。その日また「ママ友になった人にここを教えられて～」と入園希望のおかあさん。下の名前はAちゃん、30歳を超えたところ、おお！あの子ではないか。弟は　くん、丸橋町の川沿いの住宅、今はマンションになってしまったけれど。この夏にもいろいろ訪問者があった。一人ひとりに、相手にしてみればいい加減忘れてよというようなエピソードもうれしげに語ったわたし。でもわたしもなかなかのもんだわ。しかし今の子どもたちが25年後に連絡してくれても、このわたしは「覚えてるわよ！」とは答えられないなあと思うとちょっとさびしい。

(J)